

亜急性硬化性全脳炎の疫学調査

研究分担者:東京大学医学部小児科 岡 明

亜急性硬化性全脳炎 全国サーベイランス調査

目的: 本疾患の新規患者の発生状況の把握
本疾患の現状での臨床経過
治療法の選択との関連

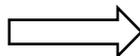
サーベイランス2017
(前回2012年に実施 5年後の実態調査)

一次調査

全国小児神経医療機関
全国神経内科医療機関

目的 全国の患者数の把握
新規発症の状況

今後予定
二次調査



・二次調査協力可能施設
・詳細な情報記載を依頼

・発症年齢・調査時年齢・病気分類
・必要な医療的ケアについて調査



我が国では麻疹対策は効果を挙げ、海外からの持ち込みによる麻疹の発生のみになっている。

亜急性硬化性全脳炎は乳幼児期の麻疹の罹患後、時間をおいて発症するために、わが国ではまだ依然として新規患者が発生している可能性が高い。

今回の調査では新規発症の実態と、長期の罹患期間を経ている患者の健康状態や必要な医療的ケアの状況を調査する。

解 説

1. 我が国は厚生行政として麻疹の撲滅に取り組んでいるが、今後も麻疹感染後に発症する亜急性硬化性全脳炎の発生のリスクは持続している。
2. 平成24年に本疾患のサーベイランス調査全国の小児科小児神経科医療機関ならびに神経内科医療機関を対象にサーベイランス調査を行った。同様の医療機関を対象として平成29年度に調査を実施中である。